

### 3 高山市久々野町地域の民話

益田川は久々野に入り、位山と船山に挟まれた谷を流れる無数河川や、久々野と小坂の境となる阿多粕川を合わせ南流する。久々野町には「力持ち庄助」という人物の伝説が残っており、そのうち益田川と関係する「曲取岩」の話がある。

#### (3-1) 曲取岩

##### ①話の内容

ある日棚山へいくと、反保の百姓と橋場の百姓が大きな岩をかこんで、山の境でもめておったそう。

「この岩の向こう側までが、おれの土地じゃ。」

「いやそうではない、岩のそっち側まで、おれのもんじゃ。」

境の争いはだんだんひどくなって、つかみ合いのけんかになりそうになった時、ひょっこりそこへ庄助があらわれて、大きな岩を、ひょいと持ち上げ、鼻歌まじりで右手、左手ともて遊んでおったが、ポイツ、と益田川へむかってほかりこんだ。大きな岩は、バッシャン！と大きな水しぶきを上げて川のまん中へめりこんでしまったんじゃそう。喧嘩していた連中はびっくりして、喧嘩のきっかけをなくしてしまって、境目のことなどどうでもよくなってしまったということじゃ。この岩は庄助が鼻歌まじりで投げこんだので、村の衆はそれから「曲取岩」と呼ぶようになった。今でも益田川と無数河川の合流点附近にその岩があり、庄助の名残をとどめている。(『久々野のむかし話』)

##### ②取材調査

益田川と無数河川の合流地点に曲取岩があり、付近では鮎釣りをする人たちの姿があった。曲取岩の大きさからして、人間が持ち上げられるものではないと感じたが、スケールの大きな話は興味深い。

曲取岩の近くには益田川上流漁業組合がある。組合職員の矢島順子さんから話を聞いた。

「曲取岩は大岩ともよばれている。岩の上には、小高い山がある。物語では棚山と書かれているが、私たちは城山とよんでいる。城があったのではなく、あの山の上に登って、見張り台として使っていたので城山とよばれていたと聞いている。曲取岩は庄助が投げたのではなく、城山の岩が崩れて落ちてきたものかもしれないと言われている。」

「曲取岩に近づく道は、城山から降りていくしかないけれど、松の木が伸びていて、なかなか近づけない。私たちも近づかないし。」



曲取岩付近での聞き取り調査  
(7月27日高山市久々野町)



曲取岩(7月27日高山市久々野町)

『力持ち庄助』は、土川庄助という実在した人物で、子孫の方も代々久々野で生活をしていました。」という話に驚いた。土川家は代々庄助を名乗る農家で、肝煎をした人もいる。江戸時代の四代目庄助が力持ちで有名だったようだ。久々野出身で本校地歴科講師の井戸端清司先生に聞くと、久々野では有名な人物だという。

### ③研究・考察

「力持ち庄助」の逸話はこの他にも数多く残されている。『久々野のむかし話』からその一部を紹介する。

- ・ 貴船神社に力比べをするための大きな石があったが、庄助はその石を放り投げては片手で受け、放り投げては片手で受け、とまるで「お手玉」をしているように軽々とあつかったので、その石をお手玉石とよぶようになった。
- ・ 高山の代官所の庭に大きなぎんなんの木があり、眺めが悪かったので、移し変えてくれ、と言うと、庄助が大きな木を両手で引き抜いて他の場所に差し込んで植えた。
- ・ 荷物を積んだ牛を連れて山道を歩いていた庄助が、向こうからやってきた牛とすれ違えなかったで、自分の牛を持ち上げて岩の上に載せた。牛を載せた岩を牛岩という。
- ・ 庄助が苗代の田かきで、馬の鼻とりをしていると、自分の家への道を聞かれたので、「あっちじゃ」と言い、持っていた馬の鼻とりざおで自分の家を指さしたら、馬ごと持ち上げていた。

そして、後述する小坂の小太郎との力比べの話が伝えられている。久々野の話では、庄助の家で、庄助の帰りを待っていた小太郎の持ってきた金棒を庄助が捻じ曲げ、それを見た小太郎が驚いた、という話になっており、小坂の話では庄助と小太郎の立場が入れ替わっている。

そんな力持ち庄助だったが、ある日突然力を失ってしまう。それは、庄助が入っていた風呂桶を庄助の娘が持ち上げたら、それからは普通の人になってしまったという話である。「原助」の風呂桶を持ち上げた高根の「おちん」の話とも共通しているようだ。



久々野町美女街道から乗鞍岳方面をみる

(7月27日)

### (3-2) 釜淵

#### ①話の内容

益田川沿いの引下と小坊との間に弘穂橋という橋があるが、そこからおよそ百メートルも下流のところに青々と渦巻く流れがある。そこを「釜淵」とよんでいる。

この釜淵に流れて入る川上は浅瀬でな、白くて太陽の光に映えて、さらさらときよく流れる水は実に美しく、じっと立って眺めていてもあきることを知らぬ位の見事な眺めであったそう。むかし村人がこの瀬を眺めて立っていると、お膳やお椀が波にゆれて流れていたのを、

「神さま貸してください、」

と頼むと、ちゃんとお椀が浮いてきたので、それを家に持ち帰って使ってから淵へお返ししたそう。それから後もお膳やお椀がほしいときは、

「どうかお願いします。お膳とお椀を借してください。」

と淵に向かって頼むと、ふしぎなことに波の上に、ポッカーリ、ポッカーリとお膳やお椀が現れてくるので、村人それをかりてつかっていたそう。返すときは、「よう貸してくれたえな、又たのむぜな。」と喋ってかえしていたというこっちゃ。

ある時、一人の男が、

「こりゃ、いつでも頼めばかしてもらえるで、このお膳とお椀は家において、使うことにして返さずにおかまいか。」

という横着な者があって、借りてきた膳や椀を返さなかったということがあったそうじゃ。ところがその人は病気になって長い間寝こんでしまったという。それから後は誰が頼みにいっても、もう膳も椀も浮いてこなかったということじゃ。

「一人の横着な者が悪い心を起こしたために、そのたたりで病気になったんじゃ。」

と村人は語り合ったそうじゃ。

そのために村人はそれからお膳やお椀をかしてくれ、貸してくれといくらたのんでも、もう浮いてこなくなった。その不思議な淵を「釜淵」と呼ぶようになったそうじゃ。

しゃみしゃっきり。(『久々野のむかし話』)

#### ②取材調査

話の舞台である引下と小坊の境を訪ねると国道 41 号線のカーブ沿いに弘穂橋の古い橋台が残っており、北側に新しい小坊橋があった。資料の記録も、古い橋台に刻まれている文字も「弘穂橋」であるが、新しい赤い橋には「小坊橋」と記されている。

地元の方複数名に尋ねたが、古い橋も「コボウ橋」と呼んでいたという方ばかりであった。小坊の地名の方がなじみがあるからか、「コウボ橋」という名を使うことはなかったそうである。



弘穂橋の橋台 (右) と小坊橋 (左)  
(7月20日高山市久々野町)



釜淵は橋の下流すぐのところにあった。深さが深く、川の流れも速いため、地域の人たちが水遊びなどをしたのは、もう少し下流にある「マワリ淵」だったという。

### ③研究・考察

「膳や椀を貸してくれる淵があり、皆がありがたがったが、やがて返さない者が現れ、以後は貸してくれなくなった」という内容の話は、高根や下呂にも残っている。また、高山市国府町広瀬にもあり、全国的に椀貸伝説として残っているようだ。

これらの淵は、龍宮につながっていて、神様がいることになっている。下呂の「椀貸せ淵」の話は、釜淵と同じ内容であるが、椀がなくなった後、椀を取り返そうと龍が登場する話となっている。



釜淵（7月20日）



小坊橋（7月20日）



釜淵の下流、渚橋から見た益田川（8月13日）